

水晶の棺

招待所の窓から覗き見ると、空は白く、熱気を充滿させている。北京はもう盛夏のようだ。かすかに耳鳴りさえ聞こえてきそうなその白い情景の底の方からは、広い道路を通るクルマのエンジン音が響いてくる。

招待所のベッドに腰を下ろして、またひとりここから旅立つ者を見送っている、まるで取り残された者のような気がしてくる。がらんとして人影の少ないドミトリーの部屋。二か月前にはあれほど広漠と感じられた旅の前途が、今はすべて後方へと去り、漠然とした終息の感慨に僕はとられる。だが、たとえ旅が終わっていくのだとしても、僕は僕を終えることはできない。

さて、と僕は自らに気合を入れる。それに、まだ着いたばかりの北京で旅の終わりの感慨に浸っていたのでは北京に対して失礼というものだ、とも僕は思う。

感慨に浸るといふ心の傾きにふたをして、僕はナップサックを背負う。エレベーターを下り、フロントの売店の女性に軽く挨拶をして招待所から足を踏み出す。六月末の北京の白い日差しの中に足を踏み入れる。僕は僕を終えるわけにはいかないということ、それはつねに僕を現実の方へと差し出すということなのかもしれない。

招待所を出てすぐに、招待所や僑園飯店の宿泊客を相手にしているように思われる雑貨屋が数軒並んでいる。昨日、日本人旅行者がチェンジマネーのイカサマにあったところだ。雑貨屋で両替すれば問題はないのだが、けれども、フリーで声をかけてくる者には要注意ということだった。イカサマにあわないように注意しなければという思いと、せつかくだからその手口を見届けてみたいものだという思いを漠然と抱きながら歩いていくと、トトトという感じで若い男が近づいてきた。

「チェンジマネー、一八〇元。オーケー？」と男は言うのだった。

いかにもこずるそうな男の視線に、すぐにピンときただけれども、手持ちの人民幣が残り少なくなっていたこともあり、イカサマの手口を経験してみたいという好奇心もあって、僕は男の口車に乗る。

一〇〇元のFEC札を差し出すと、男はポケットから一〇札のひとつかみを交換に手渡すのだった。

「確かに一八〇元あるかどうか確かめろ」と言う。

男の言うままに一枚、二枚と数えてみる…と、一七〇元。

「一七〇元しかない」と言うのと、本当か？というような顔をしながら、札束を男は自分でもう一度数える。

…やはり、一七〇元。

「悪い、悪い。数え間違いだった」と言いながら、男はポケットから一〇元札を出し、さっきの札にプラスして僕の方へと突き返したと思う瞬間、どこかうしろの方から他の男の声がして、それを合図にしたように、あわてて男は立ち去ったのだった。なにがどうなったのか分からなくてポカンとしていたのだけれども、ふと我に帰り、手にした人民幣を数えてみると、なんと一〇〇元しかないのだった。あわてて男を捜したけれども、歩道にはただ北京の白い日差しが照りつけているだけ。まるできつねにつままれたかのようなイカサマだった。

たぶん不足の一〇元を足すときに、男は八〇元を抜き取ったのだ。そしてうしろの方から男の声がしたのは、たぶん警察が来た！ということを書いていたのだろう。両替は非合法なので、そのことで力モのほうもあわてるし、もう一度札を数えるまもなくあわてて消える口実にもなるということだったのだろう。昨夜の日本人の話を考えても、まるで絵に描いたようなシナリオどおりのやり口でだまされた自分にあきれてしまった。七、八〇元というと、僕にとってはたいした額ではないけれども、中国ではちよつとした金額だし、それよりも自分から進んでカモになりになったような感じで、そのような馬鹿な自分にあきれてしまったのだった。手もとに残された人民幣の一〇〇元をポケットに突っ込んで、僕は北京の洗礼にむかつきながら南站の方へと歩いていったのだった。

南站から一路北上して、前門まではバスで十分ほど。あいかわらずの賑わいを見せる前門から地下道をくぐり、天安門広場へ。

百万人の集会ができるという天安門広場の中央には人民英雄紀念碑がそびえ、その南には毛沢東の遺体が安置されている毛主席紀念堂がある。毛主席紀念堂の前には行列ができていた。整然とした参観のために、入場制限をおこなっているのだ。紀念堂脇の手荷物預かりに荷物を預け、手ぶらで行列に並ぶ。行列はたいしたことはなくて、すぐに紀念堂の入口の方へと進んでいく。行列に並んでいる中国人たちのほとんどは観光客としてここ北京の天安門へとやって来た者たちだろうけれども、なにか肃然とした雰囲気漂わせていた。中国人にとって毛沢東という人物は単なる革命の英雄という以上の意味を持っているのだ、と僕は思う。紀念堂入口付近には献花の花束を売る人々もいて、幾人かが購入していた。

入口を入っていくと、大きなホールがあり、その正面に毛沢東の白い座像が安置されている。その背景には大きな山水画。言葉少なく行列は進み、座像の前を通るとき、ある人々は静かに花を捧げた。行列はそのままホールを抜けて、毛沢東の遺体が安置されている部屋へと入っていく。毛沢東

の遺体は国旗の五星紅旗にくるまれて、水晶の棺に安置されている。棺の脇には直立する衛兵。行列は寡黙に棺の脇を通っていく。すすり泣きをするような声がどこから聞こえてきた。照明のためだろうか。遺体の顔色はまるで眠っているかのようなようだ。部屋の正面には『偉大的領袖和導師毛沢東主席永垂不朽』の文字。

中国人にとつて、毛沢東の遺体との対面はある種の情を通いあわせるような経験なのかもしれない。例えば毛沢東その人や毛沢東が体現する中国の現代史との。そこには対面する人々それぞれの歴史が重なりあひ、彼らはまるで偉大なる父親に対面するように、情を通わせるのかもしれない。そのことを部外者としての僕は悪く言うつもりはない。しかし毛沢東の遺体と対面して僕が感じたのは、なにか凍てついた印象だった。凍てついた毛沢東の表情。凍てつい革命。凍てついた歴史。そして物事をそのように凍てつかせる力（あるいは権力）の存在を僕は感じていた。遺体はとても政治的だ。それはある意味では生きている。人々の情を組織する力として。

行列の中からちらつと遺体を振り返ったとき、衛兵のひとりが大きなあくびをしているのが目についた。僕はなにかほつとしたような気分です。その不謹慎を見つめたのだった。

三々五々観光客が行き来する天安門広場を歩いていく。毛沢東と周恩来の筆による人民英雄紀念碑の脇を通り抜けて、天安門広場の北の端へと至る。広い道路を隔てて、天安門はそびえていた。天安門の姿はテレビのニュースなどでもお馴染みだ。門楼には五つの門が開いていて、それぞれの門の前には石橋が通じている。五つの門の中央には毛沢東の肖像が掲げられ、その両脇には『中華人民共和国万歳』と『世界人民大団結万歳』というスローガン。

門をいったん通り抜けたところにチケット売り場と手荷物預かりがあり、観光客で賑わっていた。チケットは一〇元ですんなりと買ったのだけれども、手荷物預かりで外国人だと見破られて外国人料金、三元（FEC）を取られた。ちよつとした心のむかつきを感じながら天安門を登っていく。

天安門は明、清兩朝の皇城正門であり、その建造は一四二〇年。当時は承天門と呼ばれた。以降、破壊されたり改築されたりしたが、清の一六五一年に改築され、天安門と名付けられた。外見に劣らずその内部の建築装飾も立派なものだ。

天安門の楼上から眺めると、その真下にクルマが行き交う大通りが横たわり、その向こうには灰色の広漠とした天安門広場が広がっている。広場の中央には人民英雄紀念碑がそびえ、その背後には毛主席紀念堂が控

えている。漠然と僕は、背後に周恩来、劉少奇、朱徳などの革命の英雄たちを従えて中華人民共和国の成立を宣言する毛沢東の姿を思ってみる。陸続とひるがえる赤旗と天安門広場をうめつくす人民の海。あるいはそれは今ではほとんど否定的な評価しか与えられてはいない文化大革命時の映像であつてもいいし、あるいはまた記憶にも新しい一九八九年の天安門事件の映像であつてもいいだろう。今それらの人々の姿は幻のようにかき消えて、初夏の日差しに焼かれた広場にはまばらな観光客の姿が見えるだけだ。あの人々の力、人々の力が結集して歴史を変え、あるいは変えるかのようにだった人々の力はどこへ霧散してしまつたのだろうか。それは情景の奥深く潜行しているのか。あるいは開放経済の大きな流れに跡形もなくさらわれてしまつたのか。

この広漠とした天安門広場をうめつくす群衆。そのような動員型の政治。そのような政治や運動がリアリティーを失っていくのは日本でも中国でも同様のことなのかもしれない、と僕は思う。現代の歴史を動かす新しい政治、新しい人々の結びつきの姿はまだまだ見えてはこないけれども。

この次に天安門広場に政治が渦巻くとき、それは共産党の独裁が打倒されるべきだろうか、それともそのような政治的な焦点のないまま、共産党の独裁はゆつくりとその内部から崩れていくだろうか。僕には革命のロマンよりも後者の方がリアルな映像として感じられるのだけれども。

天安門から北へ、故宮の正門へと至る道にはお土産物屋や食堂が並んでいて、観光客で賑わっていた。そろそろ腹も減ってきたし、休憩も兼ねて、快餐の屋台で昼ごはん（五元）。

故宮の入場料は中国人に成りすまして、一〇元。

故宮は明、清代の宮殿で、紫禁城、皇宮とも呼ばれる。映画、ラストエンペラーなどでもその姿はよく知られているけれども、一歩足を踏み入れるとまず驚かされるのは、そのとてももないスケールだ。その敷地は東西七五〇メートル、南北一〇〇〇メートル、総面積は約七二万平方メートルにも及ぶ。

正門から入っていくと、一直線に太和殿、中和殿、保和殿と宮殿が並んでいる。そのそれぞれが独立した宮殿と言つてもいいような規模であり、また立派な建築なのだ。それぞれの宮殿の中には入ることはできないけれども、その内部は当時のままに再現されていて、外から覗き見ることができる。とは言つても、観光客は決して少なくはなくて、中国人の観光客の肩越しに覗くことができるだけだ。

とても暑くて、しばらく見学していると、僕はぐったりとしてしまつた。

宮殿の土台に腰を下ろして、煙草を一服。僕の目の前を、中国各地からの観光客や外国人の観光客が通り過ぎていく。お互いに写真を撮りあい、あつちへうろろうろ、こつちへうろろうろ、珍しいものを捜し、またどこかの地方からやって来たらしいおじいさんは僕の隣に腰を下ろして、ぷかり煙草をくゆらせる。

故宮は観光地なのだった。映画、ラストエンペラーの記憶があつたからか、僕には紫禁城に対してある種の身構えがあつただけでも、そんな感傷は観光という圧倒的な圧力の前にはたわいのないものに過ぎないのだ。誰もがそこに足を踏み入れることができる。そういう意味では誰もが平等であり、誰も禁止されてはいない。そしてそういう意味で民主的であることは、俗になるということとよく似ているのだ。ある時代には屹立した巨大な聖が、今や俗としての有象無象によつて観光され、スナップの背景と化し、あるいは悪く言えば踏みにじられ、そして俗世間の観光物と化す。それはなにも悪いことではないと思う。他ならない、僕こそが俗なのだ。僕たちにとつて必要なのは、俗を俯瞰する権力的な視線ではなく、俗の内部で今なにが起りつつあるかということを見る視力なのだと思う。

故宮の乾清門から北は内庭と呼ばれ、皇帝が日常生活をした場所だ。その内部には宮殿がやはり、乾清殿、交泰殿、坤寧殿と並んでいる。それらの宮殿や陳列館の展示などを一通り見学して、故宮の裏門、神武門から故宮をあとにする。その規模から言つても、あるいは歴史的な深度から言つても、あまりに圧倒的なものを見せられたようで、それを理解することはおろか、爪の先もひっかけられないもどかしさのような感覚だけが、僕の中には渦巻いていた。

故宮の北の門を出て、そのまま西の方へしばらく歩くと北海公園がある。少し肩の力を抜いてゆつくりとしたかつたので、そちらの方へと歩いていった。

しばらく歩いていくと、歩道にスイカの屋台が出ていた。切り売りのスイカで、そばのベンチで食べることができる。とても暑いし喉も乾いていたので、ふらふらと吸い寄せられるように屋台に近づき、スイカを指差し、若者の差し出したスイカにそのままかぶつかぶりついたのだった。

「シーイーカーイ」と若者は言葉を投げた。

僕は一瞬、えっ？と思ひ、言葉が分からないふりをして一元札を出したのだけれども、若者はかぶりを振り、

「シーイーカーイ」と繰り返すのだった。

スイカの切り身はけっこう大きくて、食べごたえはあつただけけれども、一二元はあまりだと僕は思う。しかし食べてしまったものを突き返す

わけにもいかず、しぶしぶ一二元を差し出した。もしかしたら観光客の多い場所なのでスイカも高いのかもしれないけれども、たぶんボられたのだろうと思う。スイカはおいしかったけれども、少し後味悪く、屋台をあとにしたのだった。

北海公園の池には蓮が密生していた。池端のベンチで憩うカップルに混じって、ベンチで休憩。池の表面をおおう蓮の緑の向こうは瓊島と呼ばれる島で、その中ほどにチベット式の白塔がそびえている。

しばらく休憩したあと、瓊島へ通じる橋を渡り、白塔の下まで行ってみたのだけれども、あいにく工事中で中には入れず。

路線バスに乗って、北京站へ。青龍橋行きの列車のチケットを買わなければならぬのだけれども、実は北京では售票処は行き先によって異なり、街中に点在するのだ。北京站の售票処では当日券しか扱っていない。北京站前街の售票処が北京発各地域の翌日、翌々日の硬座切符を扱っているということだった。

北京站から前街へとしばらく歩き、すぐに售票処を発見。硬座の予約券を買う人は少ないのか、とても小さな售票処だった。人も少なく、いくつかある窓口の前には数人程度。しばらく並び、

「明日の、三三三次の青龍橋行きを一枚」

と告げるのだけれども、うまく行き先が服務員に伝わらない。たまたまうしろに並んでいた女性が僕の意図を察し、加勢してくれた。しかし服務員の答えは、青龍橋行きの明日の切符はここでは売っていない、北京站へ行くように、ということだった。

前売り券はこのはずなのに、と考えながらも、とにかく服務員の指示に従って、北京站の售票処へ。

北京站の售票処はうってかわって切符を求める人々で混雑していた。しかし售票処の混雑には慣れているので、迷わず行列に並んだ。十分ほど並んで、窓口の服務員に大声で行き先と列車番号を告げる。だが期待に反して、服務員は、明日の切符はここでは売っていないと答えたのだった。

一瞬呆然としているあいだに、窓口からはじき出されてしまった。

前街の售票処では北京站と言われ、北京站では売っていないと言われて、僕は途方に暮れてしまう。仕方なく、外国人窓口へと足を運んだのだった。

外国人窓口ではもちろん切符はスムーズに買うことができたのだけれども、硬座代金は倍の九元、それに服務費三元なり。もちろん。ちよつと腹が立つけれども、まあいいだろう。

地下鉄に乗って、旧内城南東角に位置する北京站から同じく北東角付近に位置する雍和宮へ。夕方近くの時間をチベット仏教のお寺でゆっくりしようと思ったのだ。それにチベットの匂いを少しでも感じられたら、という期待もあった。

地下鉄、雍和宮駅からしばらく歩くと、すぐに雍和宮は見つかった。寺院の建物はどことなくチベットの感じがするのだけれども、ラサの仏教寺院とは似ていない。赤を主体にした柱の色などはむしろ中国的な感じがする。この寺院はもともと清朝雍正帝の御殿をチベット仏教の寺院にしたものだということで、そのことも関係あるのかもしれない。

南から門を入っていくと、鼓楼、鐘楼、そして寺院の大きな建物が南から北にいくつか並んでいる。寺院の建物の中には様々な仏像や仏画が展示されている。地上一八メートルの弥勒仏や金色の釈迦牟尼像あるいは男女神合体仏など。なかでも男女神合体仏は仏画のものしかラサでは見えていなかったので興味深かった。ただ仏像の下半身には白い布がまかれていて、見えないようにされているのだ。神々の隠された下半身…、と僕は思った。白い布が、男女神合体仏をいやらしいものと考える観念をあらわしているようで、その作為のいやらしさが、僕は嫌だった。

参観時間も終わりに近づいているからか、境内には観光客も少なく、僕は一日の疲れを癒すようにゆっくりと境内を散歩したのだった。チベットはずいぶん遠くになってしまったな、と僕は思う。様々な仏画や仏像はもちろんすばらしいものだけれども、いぶされるようなヤクバターや香木の匂いのないそれらは少し寂しい感じがした。まるで異なる文化のただ中にひとりあるような。この境内を一步外に出ると、そこは地下鉄や自動車が忙しく走りまわる北京という都市であるということが、なにかひどくそぐわないもののように、僕には思われるのだった。

地下鉄で前門まで戻って、昨日預けた写真を受け取る。

前門からちょうど永定門までの中間あたりにある天橋のあたりまで歩き、京劇の天橋劇場を捜した。夕暮れ時の庶民的な街路や路地裏を歩き、ようやく見つけた天橋劇場で上演時間を調べる。午後七時に開場で午後七時半に開演。もしも時間があれば見に来ようかと思う。

天橋劇場からバス通りまで歩いて、南站行きのバスを待っていた。なかなか来ないバスを待ちながら、煙草を一服。しばらくするとバスが来た。あわてて煙草を踏み消し、バスに乗ろうとすると何者かが肩を叩く。振り向くと、私服の服務員だった。煙草のポイ捨てで、罰金は五元なり。むかつとして、五元札を押しつけるようにして、バスに飛び乗った。ふと南京の船の售票処で罰金を取られたときのことを思い出した。罰金で始まり、

罰金で終わる　…と、ふと思う。あれからずいぶんと時間がたったような気がするし、中国のことが少しは分かったような気もするのだけれども、ぐるっとひとまわりして、やはり出会うのは「当惑」なのだ。

招待所のベッドに戻って、出来上がった写真を見てみた。すこしくすんだような色合いで、あまり良い出来上がりとは言えない。噂によると現像液かなにかを何回も使い回すからだという話だ。しかし写真そのものは記憶を思い起こす助けになれば十分なので文句はない。

ところで青龍橋までのチケットの話だけれども、カメラ（同室の若者）はこれまでのように行き先を紙切れに漢字で書いて窓口に差し出すという方法で難なく手に入れたという話だ。そんな方法だとすぐに外国人だと見破られてしまうのではないかと、僕はずっと苦労して中国語で大声で注文していたのだけれども、取越し苦労だったのかもしれない。售票処でたらいまわしにされたのは、逆に変な発音でうさんくさい奴だと見られたからかもしれない。